



リナ・ボルツォーニ 著
 足達 薫+伊藤博明+金山弘昌 訳
 ▶クリスタルの心
 ルネサンスにおける愛の談論、詩、そして肖像画
 11・25判 A5判624頁 本体8000円
 ありな書房

人物の内面の真を知る手がかりを もたらす「二重肖像」の分析

示唆的な多くの資料が示されている

浦一章

ボルツォーニ『クリスタルの心』は、訳者のひとり伊藤博明氏による「あとがき」の表題「愛をめぐるテクナストとイメーシの照応と交錯」が適切に要約しているように、ピエトロ・ベンボ（一四七〇―一五四七）のイタリヤ語による愛をめぐる対話篇『アソロの談論』（ありな書房、二〇一三年）と、その背景にあって、著者ベンボの筆に影響をあたえたと感じさせる形象芸術（肖像画、メダル等）との関連を解明しようとする意欲的な試みである。『クリスタルの心』は四部構成の書物である。第一部では、『談論』の綿密な読解作業が、その手稿や初版、最終版の間の異同を視野に入れつつ、またベンボのその他テクナストとの関連に言及しながら行われている。『談論』が踏まえている、著者ベンボの自伝的要素や歴史・文化的背景が興味深く照らし出されている。第二部および第三部は、歴史・文化的背景の中でも、『談論』に関連していると思しき形象芸術を詳しく論じている。第二部では、内面をいかに表現するかという問題をめぐって行われる、言語芸術（とりわけ詩）と肖像画の優劣比較、あるいは両者の間の対抗関係や協働作業が論じられ、示唆的な多くの資料が示されている。ちなみに、表題の「クリスタルの心」は、恋人に内面を隠さない心の様態を表わすベンボの詩句を踏まえている。第三部では、「二重肖像」と言われる特殊な形態の肖像

画がとり上げられている。「二重肖像」にあっては、イメーシの全体を二度に把握することほできず、ふたつ目の肖像を見るためには、「裏返す」「覆いを外す」などの物理的な作業を必要とする。描かれた人物に対する解釈は時の経過の中で展開することになり、ふたつ目の肖像はしばしば人物の内面の真を知る手がかりをもたらす。『クリスタルの心』のカヴァー、表紙、扉および一六頁、三五八―三六〇頁等には、レオナルド・ダ・ヴィンチ《シシヴス・デ・ベンチ》が繰り返し掲げられているが、この作品は「二重肖像」のひとつであり、その作成にはベンボの父ベルナルドが深く関係していた。第四部は、第二および第三部で詳述された形象芸術と『談論』の関連付けにあてられている。

ボルツォーニの別の著書『イメーシの網』（ありな書房、二〇一〇年）にも見られるように、また『クリスタルの心』にも「ネットワーク」「網」などの用語が散見されるように、著者は言語芸術と形象芸術を、『談論』と若きベンボの形象芸術に関する経験を引きあわせようとする。その企てに「ボルツォーニが成功したか」の最終判断は個々の読者が下すべきであるが、あえて私見を述べると「『網』は緩い」と言わざるを得ない。理由の一端は、邦訳にしたがって、分量配分は第一部一九一―一六三頁、第二部一六三―二六八頁、第三部二九一―四六三頁、第四部四六五―五二六頁であり、第一部が極端に短く、第一部から遠く隔たっているという点にある。もちろん、第二、三部が不可避な作業であることは、すでに認めよう。しかし、第二、三部が充実し、豊富な情報を提供しているのは、先行二部の議論を踏まえた第四部から第一、二部でもいえることが困難になる。『網』が密である「と判定できなかった」ためには、決して短

くはない『クリスタルの心』をおそらく再読することが求められよう。時間のない読者には、むしろ各部の連関などを忘れて、それぞれ独立したものとしてみなされることを勧める（各部分は、それに耐えるだけの濃密なものを宿している）。皮肉なことに、ボルツォーニ自身もベンボとの関わりをあまり意識せずに書いていた箇所、とくにピエロ・テッラ・フランチェスカ、ラファエロ、ティツィアーノの手になる「二重肖像」の分析などが、『クリスタルの心』の最も興味深いところであろう。

『談論』は、人生の岐路に立ち、理想と現実の間で引き裂かれていたベンボの、いわば「二重肖像」なのだろうか。ボルツォーニは「また」と主張し、それがベンボの形象芸術に関する経験に由来するとしたのであろうか。文学作品一般においては、またとりわけ対話篇というジャンルにおいても、作者の立場を代弁している人物を特定するのは、しばしば容易ではない。たとえば、ベンボの同時代人フランチェスコ・グイッチャルティニ（一四八三―一五四〇）作『フィレンツェの政体をめぐる対話』（大陽出版、二〇〇〇年）では、作者の立場を代弁するのは、フランチェスコの父ピエロではなく、ベルナルド・テル・ネーロである。また、レオン・パティスタ・アルベルティ（一四四一―一四七〇）のいくつかの対話篇においては、作者の分裂した意見が複数の登場人物に投影されているように思われる場合がある。それゆえ、『談論』に対する「二重肖像」の影響があったにせよ、文学における対話篇の伝統と影響はやはり考慮されねばならない。「『網』は緩い」と感じられる、もうひとつの理由がこれである。

（東京大学文学部教授・イタリヤ文学）